

池田市制施行80周年記念特別展

没後50年

富貴のひと 鍋井克之

その3

池田ゆかりの洋画家・鍋井克之の特別展を、歴史民俗資料館で10月11日(金)から開催します。今回は、文筆家としても一流だった、彼の「本の仕事」についてみていきましょう。

親友・宇野浩二

鍋井は、画業のかたわら、多くの著作を残しました。自著だけでも11冊、雑誌などの短編まで含むと、膨大な数にのびります。洒脱な文体の随筆はとくに秀逸で、多くのファンを持ちました。

そんな彼の「もう一つの世界」に生涯寄り添い続けたのが、小説家・宇野浩二です。天王寺中学校で鍋井の1つ下だった宇野は、小説家を志すかたわら、美術をこよなく愛しました。鍋井や青木広峯(大乘)、寺内万治郎ら、のちの画家たちと交わり、また鍋井自身も、彼から大きな影響を受けました。

鍋井と同じく上京し、早稲田大学に進学した宇野の周りには、多くの若い「芸

術家の卵たち」が才能と情熱を持って余していました。画家、小説家、劇作家、俳優。狭い下宿屋やカフェ(当時は芸術家の溜まり場だった)で繰り広げられる交友のなかで、鍋井も、元来の文才を開花させていきます。当時の文芸誌『改造』や『文章世界』に投稿した小説は宇野も認めるほどで、帰阪後も、自ら編輯を手掛けた雑誌に詩を載せるなど、関心を寄せ続けました。

この時期は、ちょうど美術学校の卒業前後にあたります。「何を描くべきか」。迷いもあったのでしょうか。ですが、この頃経験した幅広い分野の人びととの交流が、画家としての彼の世界を豊かにしたことは、間違いありません。



宇野浩二(左)と鍋井

小説家と画家

中学時代、当時大流行した絵葉書で絵と文を交換し合った頃から始まる、鍋井と宇野の「相棒」関係。それを最もよく表すのが、宇野の著作です。単著だけで38冊。彼の全著作の4割近くに、装幀、挿絵、何らかの形で鍋井が関わっています(代表作『蔵の中』や『枯木のある風景』には、作中のモデルとしても登場)。

小説家にとって、作品を可視化するブック・デザインや挿絵は、自身の世界を変えかねない、大変重要なアイテムです。デザイナー「商業美術」は、近代化著しい当時の大阪で注目の新分野でした。なかでも意匠圖案は、本面だけでは生活できない新進画家たちにとって格好の仕事だったようです。鍋井は、学校を卒業してから渡欧するまでの一時期、中学時代の同窓生が経営した出版社「大鏡閣」(大阪店は南船場にあった)などで装幀を手掛けていました。同時に、同じ会社の経営と思われる図案所の主任におさまるなど、彼は編著者の代弁者、また売れる本としての「文字と絵の関係」を、体得していきました。

挿絵も、貴重な収入源でした。鍋井が描いた挿絵は、新聞小説など相当数ありますが、自著を除けばそれほど多くありません。その中でひとときわ目を引くのが、



宇野浩二著、鍋井克之装幀「思いがけない人」(関西大学図書館蔵)

宇野浩二の童話です。宇野は、精神病を患って文壇から離れていた数年間、その復帰へ向けたステップとして、多くの童話を書きました。鍋井は、「相棒」としてそれを支えたのです。

文才に長け、図案や挿絵の経験を通して「本の仕事」をこなした鍋井。油絵どころではない戦時中や戦後の混乱期は、この特技が大いに役立ちました。

「書く」と「描く」のスイッチの切換えに苦勞もした鍋井でしたが、彼の残した作品が、今なお読者の心をつかんで離さないのは、確かです。

今回は、鍋井が関わった地域への芸術貢献をとおして、彼の「文化人」としての姿を紹介します。

◆問い合わせは歴史民俗資料館

☎75113019